
奏-かなで-

りさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏 - かなで -

【Nコード】

N8589A

【作者名】

りさ

【あらすじ】

17歳の奏は、人気作家の裕と同棲中。確実に愛し合っているはずなのに、互いの未来を思いやるあまり、二人は不器用になってしまう。

に：SIDE 奏

裕は、私より15歳も年上であり、私の恋人。

仕事は、本を書いている…らしい。

なんでも、20歳の時にすごい賞を貰って以来、飛ぶように裕の本が売れて映画化された作品が4本もあるらしい。

ま、私には関係ないけど。

裕は、扉の所で佇む私に気がつき、おはようと言った。

私は笑った。

裕も笑った。

裕の笑顔はとても上品だから、私はいつも見とれてしまう。

「奏、今日はなにもないの？」毎朝同じ質問をする。

そして、私は毎朝同じ返事をする。

「ないの。」

裕はソファから立ち上がると、私の頭を撫でた。

裕の優しい目が私を捕らえる。

「今日も本、書くんでしょう？」

私は裕の仕事の時間が嫌いだから、いつもだだをこねる。

「奏のためにね。」

裕は抱きしめる。

私より20センチも上から、優しく。

何より、この瞬間が悲しいのなんて知りもしないで……

「今日は来るの？」

裕は、私の髪を撫でた。

ん？とだけ言っつて、適当にごまかしている。

「来るんでしょう？ 嶋田さん。」

裕はくすつと笑って私から離れ、タバコに火をつけた。

「奏は嫌いなのか？」

私は首だけで返事した。だって、裕のタバコ吸う時の手が綺麗で大好きだから…。

「悪い人ではないんだけどね。」

白い煙りが空気に溶けてゆく。

そもそも、嶋田さんとは、裕の担当さんで裕をいち早く見つけた…
言わば、産みの親みたいなものらしくて、締め切りでもないのによく家にくる人。

やけにスタイルがよくて頭の良い、美人な人。

そして私の天敵。

絶対、この人は裕を狙っている。

「さっ！朝ごはんでも食べようか？……って言っても、もう昼か。」

裕は白くて綺麗な腕を天井に伸ばす。

「お腹空かない。」

「え？だめだよ奏。ご飯は栄養なんだから。」

「知ってるよ。」

裕はくすりと笑う。

なんで、こんな無愛想な言い方に笑うのかわからなかった。

でも、裕が笑ったのが嬉しくて、私も笑った。

裕が流していたボリュームの小さいラジオが、お昼を告げた。

「外に行くの？」

私は暑さに負けてクーラーの下に移動した。

「外がいいの？」

裕はタバコを灰皿に押し付けて、ふうつと煙りを吐き出した。

「裕は？」

裕は、そうだね…、と言って窓の側に立った。

裕は大きい。

私も小さい方ではないはずなのに、裕と並ぶとまるでチビに見える。

そのうえ、裕はスタイルがいい。

以前、モデルをやらないか？と言われたらしい…
イヤミな話し。

「1時には嶋田さんが来るから、コンビニにでも行く？」

裕は、にっと笑った後で、奏のコンビニ、と付け足した。

裕はやたらと私の働くコンビニに行きたがる。

当然、自分がある『越前裕』であること、そして私の彼氏である事を隠して…

みんなには「叔父さん」と言っている。

「…嶋田さんになんか買うの？」

裕は首を横に振って、行こう、と足早に玄関に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8589a/>

奏-かなで-

2011年1月13日03時13分発行